

浄土

monthly
JŌDO

6

June 2006





南無阿弥陀佛と称え給えば

住所は隔つといえども

源空に親しとす

源空も南無阿弥陀佛と

称え奉るが故なり

浄土

2006/6月号 目次

月刊『浄土』通巻800号記念講演会概録

平和のために仏教とキリスト教の対話Ⅱ	2
法然上人木像の辿った数奇な運命	佐々木美冬 10
会いたい人 黒鉄ヒロシさん③	関 容子 16
表紙の言葉	梶谷佳加 23
出雲紀行第4回	森 清鑑 24
響流十方	小村正孝 32
シネマ随想	袖山榮眞 36
コラム	大室了皓 40
Jフォーラム	43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子 44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう 47
編集後記	48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

平和のために、 仏教と キリスト教の 対話



浄土宗大本山増上寺法主

成田有恒

日本カトリック東京大司教

岡田武夫

月刊『浄土』
通巻800号記念
講演会概録

本年1月31日、東京プリンスホテル、
マグノリアホールにて行われた、
本誌通巻800号の記念講演会の
後半内容を抜粋してお送りします。

文責 編集部

II

司会 後半は会場からの質問にお答え頂きたいと思います。最初の質問は岡田司教様へです。「小泉内閣で今よく使われている言葉に三位一体という言葉がありますが、カトリックでの三位一体について教えてください」ということです。

岡田 仏教の用語はもっとそうでしょうが、日本語の中にも、あるいは日本人の中にもキリスト教の用語がかなり入っていて、本来の意味とはかなり違うものとして使われていることがよくございます。小泉内閣の三位一体の改革は具体的になのか私はよくわかりませんが、キリスト教という三位一体の教義というのは、キリスト教の中心的な教えでございます。初代教会において成立し、キリスト教といってもいろいろな教派、宗派がありますが、その教えを正当な教義として保持している中心的な教えです。

三位というのは三つの位格と日本語で訳しているのですが、ペルソナの訳であります。三つのペルソナ、ペルソナといっても人ではないので位格と訳しているわけです。私たちが信じているのは唯一の神ですが、唯一の神は父なる神と子である神と聖霊である神と、この三つの位格があつて、この三つの位格を唯一の神として統合されているということなのです。

唯一の神、それが三つのペルソナとしてあらわれている。位格というのはあなたはだれですか、だれであるかというときに、イエス・キリストと、イエス・キリストが父と呼んだ神は別々なお方であるわけです。でも、イエス・キリストと天の父は一体であるということで、初代教会においてイエス・キリストはだれであるかというすごい論争があつて、たどり着いた神学的な表現が三位一体です。

そして、聖霊ですね。父と子から出てくる神の霊は同じ神性を持っているペルソナとして、3つの位格が唯一の神として存在している。ちよつとわかりにくい教えです

が、そういうことを言っております。

これは、何回にもわたる教会の会議で議論され、決定された教えで、その教えを簡潔に表現して、毎週カトリック信者は信仰宣言（クレド）としてミサの中で唱えています。

この教えを説明するのがキリスト教の教義の説明で、一年や二年や三年かけて説明するわけです。天の父と呼ばれている神を信じます。キリストを神として信じます。聖霊を神として信じます。この三者は一つの神様ですということがキリスト教の信仰理解の中心であります。

成田 大司教様に伺いますが、やはり三位一体には愛というものがございすね。仏教ではちよつと違うんですが、キリスト教の愛というものはどういうふうに解釈したらいいのでしょうか。

岡田 「キリスト教の愛とは何か」というのは、「神とは何か」と同じ質問になりますので、人間が神とは何かを説明することが同じくらい難しいことになります。見えない神が見える人間としてあらわして生きた人がイエス・キリストであると、キリスト教徒は信じているわけで、イエス・キリストの生き方が神の愛。一人一人の罪を許し、一人一人の救いと完成を達成する神の力が神の愛。

ギリシャ語ではアガペーと言っています。当時ギリシャの世界ではエロスという言葉があつて、エロスとは違います。神が自分で痛みを背負ってでも、人を生かし救おうとする神の意思を神のアガペーと使つて、それはイエスの十字架にあらわれているということが私たちの解釈でございます。

成田 仏教では慈悲とか慈愛という言葉を使っておりますが、ちよつと違うのは仏教

の場合は慈しみという言葉がありますね。我々浄土教の者にいわせると阿弥陀様の慈愛というものに我々はおすがりするという考え方になるわけです。

しかも、阿弥陀様というのはイエス様のように、キリスト教で言うゴッドのように一神仏かどうか。その中にはいろいろなものが含まれている。例えば、先立たれたお方。両親にしろみんな仏の国へ行っていますから、慈愛という言葉の中にはそれらの愛というものも含まれるわけです。そういう意味ではキリスト教の愛と性格的にちよつと違うものがあるかもしれないと思うんです。

例えば、今いろいろなところでキャッチフレーズなどにつかっている「おかげさまで」という言葉がありますね。日本人が盛んに「おかげさまで」と言う。「おかげさま」というのは一体だれのことを言っているんだろう。要するに、目に見えないものは何でもおかげさまなんです。

「かげ」という字は「陰」と書くんですが、何となくこれが用言化してしまつて、おかげさまで、おかげさまでと言っておりますが、あらゆるものへの感謝というものです。

対象は特別仏でもなければいわゆるゴットでもない。自然神も全部入っているわけで、人間愛というものも含まれている。日本人はそういう宗教というものに対して全方位的なものがあるんです。三位一体ではなく、全方位的なものが日本人の中にあるわけです。

その辺が、先ほど話が中断しましたが、日本語という言葉、この言葉の難しさが出てくるんですね。「おかげさま」でもわからないように、漠然としているが日本人にはツーカーでわかるんです。

その辺のところの難しさが、やはり明治以後自由に布教されているクリスチャンの

方々には、難しいところがあるんじゃないかとお察しするところでございます。

司会 平和の話を最後にお二人からいただきしたいと思います。

質問も来ております。「国会議員の数から見ても改憲は目の前に思われます。軍隊武力に守られる平和は、平和のようなものでありながら、本当の平和とはほど遠いものなのではないでしょうか」という質問です。

岡田 特に宗教者は平和のために働くべきだということを冒頭に申し上げましたが、それはどなたもご異存のないことだと思います。問題は平和とは何か、そして、どうしたら平和のために働くことになるのかということだと思います。

平和の名の下に多くの戦争とか対立が生じたかということも本当に考えさせられます。人間の心の中に恐怖とか憎悪がある限り、その反映として人は人を傷つけたり、国家が国家を攻撃したり、民族が民族を排除したりということが起こりかねない。

やはり私たち宗教者は本当に自分自身の心の「平安」というものを求めて、それを人々に伝えていかなければならないと思います。

そうすると、宗教者は魂の問題、心の問題だけをやっていけばいいのかということになるわけですが、私たちカトリック教会としましては、この世界は神のつくった世界であり、神が望まれる世界に少しでも変えていくのが、私たちキリスト者の使命であると考えております。

そして、日々の私たちの生活、そして自分自身の日々行うべき仕事を通して、この世界を神が望んでいる世界、それは「神の国」と呼ぶわけですが、そういうものに変えていかなければならない。

それで、先日我々日本のカトリック教会の代表司教が集まって、今の日本の状況を見ながら、去年ちょうど戦後60年を迎えましたので、私たちキリスト者、カトリック信者が平和のためにどのように貢献すべきかということを、短い文章にまとめて発表いたしました。

その中にいろいろなことが挙げられておりますが、日本国憲法を掲げる理想。特にこの九条を厳守し、そして、武力によらない非暴力による平和の達成のために、私たちは力を尽くしましょう。それがイエスキリストの教えでありカトリック教会の教えである。

特に去年亡くなられました教皇、ヨハネ・パウロ二世は本当に世界の平和のために心を砕かれました。たびたび非常に具体的な発言、行動を起こし、例えば、今のイラクの状況であります。イラクにアメリカと連合軍が侵攻するときも努力をして、それをとめるようになさったことを私たちは覚えております。

暴力に対しては暴力をもつてせず、暴力の連鎖を絶つように、そして、忍耐と愛を尽くして対話を繰り返すことによってしか、平和は達成できないということを言っております。

キリスト教の愛というのはどういうものかということですが、やはり自分を十字架につけたものをゆるし、そして、彼らの暴力に対して暴力をもつて対抗しなかったという、イエスキリストの生き方に少しでもあやかろうということが、私たちの目指す平和達成の生き方です。

しかし、それはすべての人にとって簡単なことではありませんが、自分自身の利益、自分の都合を第一に考えるのではなくて、特に弱い立場に置かれてた人の苦しみ悩み

を、自分のものとして受け止める。それをお互いによってしか人類の平和は達成しないだろう。

そして、キリスト教徒としての反省は、キリストはそういうふうに教え、生きたにもかかわらず、キリスト教徒は本当に戦争をしてきました。キリスト教徒同士が戦争をしてきた。

亡くなった教皇は、紀元2000年を迎えるに際してそのことを大変反省し、そしてこれは神様の前で謝らなければならない一番大切なことだとさえおっしゃって、一部ではそんなことまで言っているのかという声もあったくらいでございます。あるいは、ユダヤ人を迫害したことも率直に認めました。

そのようなことがいろいろあって、やはり私たちはイエスキリスト、私たちの宗教の創始者であるキリストの教えた生き方に帰ることによってしか、平和は達成できないというように考えている次第です。

成田 法然様のお言葉に、「いかようにも人とあい争うことゆめゆめ候まじく」とございますように、法然様はご生涯を絶対に争わないんですね。

考えてごらん下さい。75歳で島流しでしょう。我々はその年齢を通過してきて、あのとき島流しされたらどうだろうと思いますね。これはとても耐えられるものじゃないです。

それを欣然とまではいかないでしょうが、未知のところへ行つて、抵抗運動も門弟の間にはかなりあったようですが、そういうものを抑えて、1年で帰ってこられました。四国のほうへ行かれたわけでございます。

やはり、絶対に無抵抗主義だ。これは法然様だけに限りません。仏教の根本思想自

体が非暴力です。お釈迦様は出家したあと、故郷のカピラ城が隣国から攻められ危険な状況になったとき、故郷からはしきりに援助を求めてきました。別の国に働きかけて隣国に攻め込んでほしいとか。しかしお釈迦様はそうした戦乱に巻き込まれず、ただカピラ城に進撃する隣国の軍勢にお弟子たちと路上に座り込むだけでした。その都度軍隊は進撃を諦めたのですが、とうとう最後に進撃路を変更してカピラ城へ攻め込んでしまいました。父の王様以下釈迦族は滅んでしまいました。また、ヒンズー教ではありますが、仏教の系列であるマハトマ・ガンジーにしましても絶対非暴力で、これを貫いた方です。

法然様も同じように、まず非暴力ということが平和の前提になっているんじゃないでしょうか。理屈は後からくつつくので、非暴力ということが一番大事なことはないかと思います。我が浄土教、法然教としては、この宗祖のお考えを守り抜いていくということが一番大事なことでしょね。

恐らくイエス様も同じでしょう。十字架に上られたということは、やはり非暴力ということが前提になっているんじゃないですか。

岡田 そう思います。今日は計らずもこういう機会を与えていただきましたことを大変うれしく感謝申し上げます。

この日本で宗教者が宗教の枠というか、自分の宗教の枠を超えて触れ合い、話し合い、そして、一緒に宗教者の使命である平和のために一緒に働くことは、今求められている大切なことではないかと存じます。

日本の多くの人の心をとらえ、安心を与えてくださった偉大な宗教家の生涯に学びたいと心から念じております。今日は本当にありがとうございました。（拍手）（おわり）

法然上人木像の 辿った 数奇な運命

佐々木美冬



上野駅前からはほぼ真東に、隅田川は駒形橋へと直進する通りをいま浅草通りと呼ぶ。上野と浅草を最短距離で結ぶこの道には、古来何種類かの呼び名があった。曰く駒形橋通り、菊屋橋通り、新寺町通り。なかでも最も人口に膾炙かいしゃしているのは仏壇通りという通称であろう。六十軒を越す仏壇屋が南側に軒を連ねる光景は蓋し異観というべきである。

居並ぶ仏壇屋を右に見ながら行けば稲荷町。此处で清洲橋通りと交叉する。

清洲橋通りへ左折。その右側が、北清島町（現・台東区東上野六丁目）である。一信号ほどこで清島小学校（現・上野小学校）。越してすぐを右に入ったところに、今回、お訪ねすることとなった浄土真宗東本願寺派、法善寺がある。

このお寺に木造法然上人立像が安置されているという。

御住職の中山静麿師は私たちのために、こころよく尊像を開帳してくださった。

本堂、向かって右に安置されている厨子を開け、布を当て巻いて丁寧に抱き、明るい経机の上で固定する。

ああ、法然さんだ……浄土宗の関係者なら誰でも一目でそう呟くであろう。間違いなく老境を迎えられた頃の法然上人のお姿が私たちの目の前にあった。

やや前かがみ、左足を前に、いまにも前方へ歩き出すご様子である。袈裟、法衣、袴、を付けられている。両手はともに掌を腹前に向け、左手を上にして数珠を持っている。

頭頂部はいわゆる法然頭の扁平、凹を施すといった極端な造型ではないが、優しく厳しい眼差し、鼻翼の張り、肉厚の唇はまさしく法然上人のご尊顔である。

なによりも、華美の要素一切ない素朴で大胆な造りに、仏師の筋の良さと並々ならぬ才能が見てとれる。

手を合わせ、低声にお念仏を申し上げながら、しばし放心。

像高七三・五糎。不思議な縁をもって、法善寺にこの木像が安置されたのは、明治二十六（一八九三）年、九月のことである。先々代の御住職が千住小塚原の浄土宗栄安寺渡辺氏より譲り受けたという。

栄安寺は明治初年に廃寺となった由。少し調べてみると、元禄十（一六九七）年の記録によればであるが、小塚原辺りには十八ヶ寺、栄安寺は確認できないが、うち浄土宗五ヶ寺のうち、正行院、恵日院、秀保院の院号名称の三寺のどれかの寺号であったのかもしれない。小塚原の浄土宗では現在、橋本佐内・吉田松陰・ターヘル・アナトミアで有名な回向院、首切地藏の延命寺の二ヶ寺を残すのみである。

さて廃寺、什物流出について語るとき、廃

仏毀釈に触れないわけにはいかない。明治維新（一八六八）直後の廃仏毀釈の猛威は、東京の寺院をも直撃した。廃寺も数知れず、民衆の襲撃にあつて、仏像は破壊され、仏具、經典は焼かれた。ほんの数年前、タリバンによるバミヤン仏跡破壊に世界中が眉を顰めたが、わが国でも僅か百年少し前にまったく同じような蛮行が普通の人々の熱狂によって行われたのである。

しかし、少数の人々によって護られたものもある。たとえば『江戸名所図会』にある目黒蟠竜寺の露座の丈六阿弥陀仏は、打毀される寸前に村人の手によってイタリア人に売られ国外脱出して難を逃れ、いまパリの公園に保存されている。あるいは国宝、興福寺の五重塔は、わずか二十五円で売りに出され、高価な金具のみを取るために薪にされようとしたが類焼を懸念した近隣の人々のいわば消極的反対でようやく焼失の危機を免れたのである。

動機はともあれ、結果、優れた文化財がなんとか形あるまま残されたのである。榮安寺什物のひとつもまた、ここに残された。

真宗教団は廃仏毀釈の被害が比較的少なく闘いやすかったということもある。東西両本願寺が官軍の江戸侵攻駐留作戦の軍資金を支えたからである。

さて、法善寺では爾来、宗派を超えて、毎年一月二十五日、御忌会が修された。木像はその日のみ御開帳されることとなった。

やがて月日は巡り大正二年、元旦のことである。法善寺御住職はひとつの夢告を得た。夢の中で、法然上人木像の頸部より白い香煙が立ち昇ったのである。

早速、仏像に詳しいものを呼び寄せ、具に調べると、首の細工ごとが判明した。果たして、胎内仏として厨子入り木像阿弥陀如来一体、像内納入文書三点が発見されたのである。

阿弥陀如来尊像は六・二纏。聖徳太子御作法然上人御念持仏という書付文書一点。

二文書は結縁交名状。寛文十一（一六七二）年七月十五日、浄土宗聖徳寺十五世満蓮社行譽のもと、造立に関わった百六十七名の譽号法号がずらり記されて、圧巻である。

この法善寺のある北清島町の東隣は、かつての松葉町（現・松が谷二丁目）である。この辺りは一六九八年の勅願火事で焼失した浅草三十三間堂の跡地である。江戸開府後、平河口、坪根沢（現・千代田区）、大船町、馬喰町を転々とせざるを得なかった浄土宗聖徳寺は、明暦の大火（一六五七年）のあと、この新寺町に最後の移転をし定着した。元来は天台宗の寺院であつたらしいが、寺号の示す通り、聖徳太子信仰に深く関わる由緒ある寺院である。

三十三間堂跡は清島の本願寺添地と合体し浅草通りの南側、南清島町も含めて、巨大な寺町に発展したが、数次の災害、道路造成、



行政区分によって分断されたのである。清洲橋通りに沿って流れていた鳥越川の線が現在は台東区として合併された旧下谷区と旧浅草区を分ける基準となったのだろうか。現在でも下谷仏教会、浅草仏教会は清洲橋通りを境とする。

法然上人像は、聖徳寺に発し、江戸北郊、千住小塚原を経由して、廃仏毀釈、明治の大火、関東大震災、東京大空襲といった未曾有の危機をいずれも無事に過ごし、不思議にも隣町に安置されていたのだった。いま像を前に瞑目し、像の辿った長い時間を思うとき、ひとはこれを保存し保管してきた人々に深く感謝せざるをえないであろう。

その後の研究で、像内に納入されている、伝聖徳太子の木像阿弥陀如来と厨子は鎌倉、室町期のものと推定された。光背、台座は法然上人立像の制作の同時期の寛文年間、納入のための制作であったようである。

法善寺御住職は財団法人日本仏教鑽仰会の

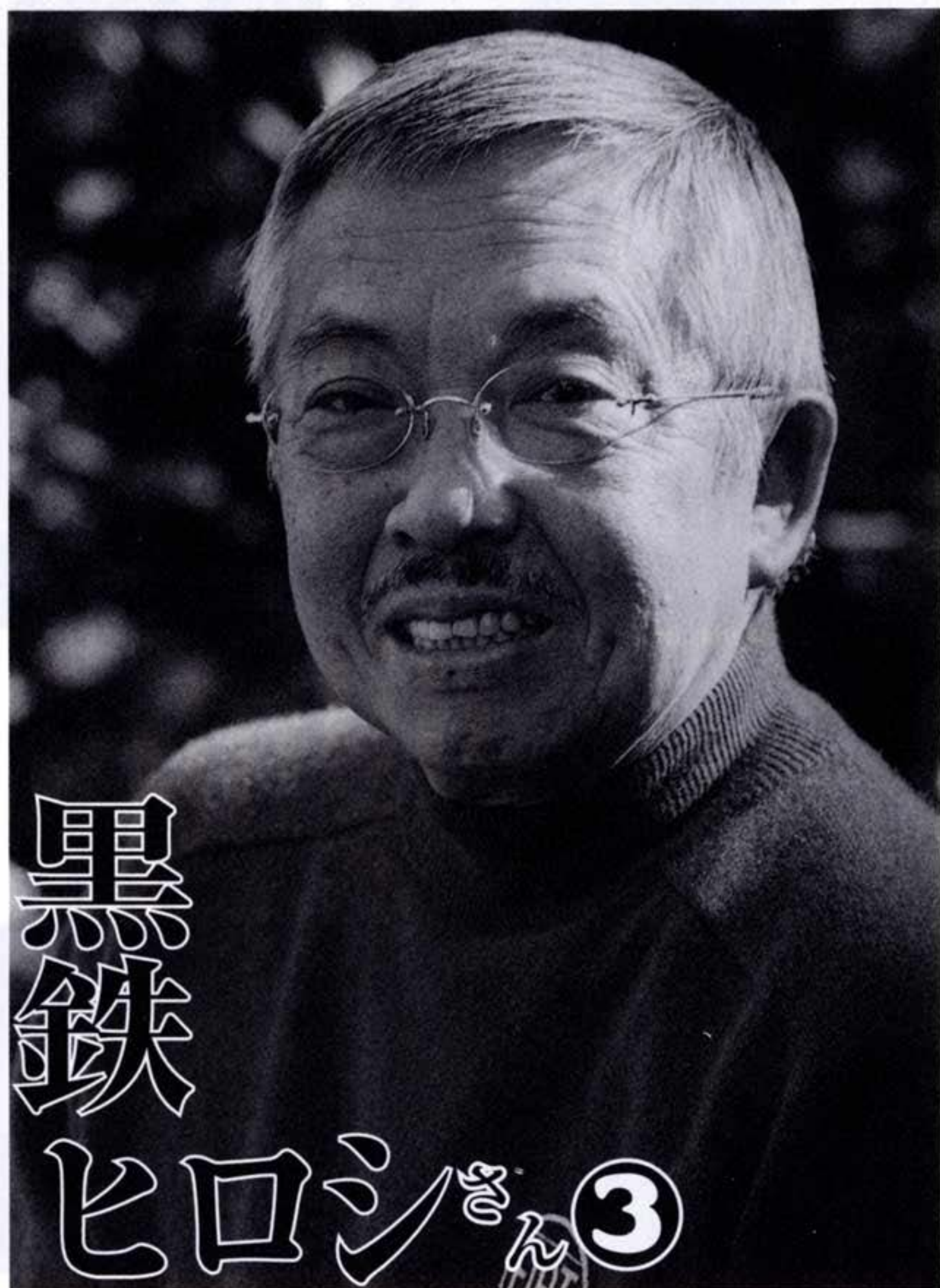
理事長。代々、過密都市東京における墓地、墓石の在り様、火葬の有り方等に根源的な提言をし、東京流ともいうべき、現在のかたちに落ち着かせた。伝道服と呼ばれる洋装の際の改良衣の発明など創意、実績の家系である。余談となるが、法善寺には『江戸名所図会』の作者、斉藤三代の墓がある。すなわち斉藤長秋（幸雄）とその子、縣麻呂、その孫、月岑。特に三代月岑の名著『東都歳時記』は筆者が江戸を語るときの必携資料である。

仏縁の面白さ、出会いの不思議さ、なによりもよきものを拝観したとの思いに満ちて、帰途、筆者は徒歩で宗源寺の裏を抜け北へ、神吉町、山伏町そして万年町と下車坂の間、昭和通りの脇道を入谷真源寺鬼子母神方向へ向かった。もうすぐ坂本の英信寺。小塚原はまだ遠く、見えない。

（ささきみふゆーコラムニスト）

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

黒鉄さんはなぜ画家にならずに漫画家の道を進んだのか。

「子供のころからずーっと絵を描いてて、絵で生業なりわいを立てたいなと思って美術大学に進んだんです。油（絵）でも日本画でも何でもよかったんですが、既にピカソとかレンブラントとかすごい絵描きがいっぱいいるから、純粋美術じゃ目標が高過ぎると思った。で、絵を描いて小説的な構成ができるもの、と言ったら漫画しかないんでね、こんなに素敵なものは見当らないんですよ。それでいて社会的なスタンスというのはそんなに高くないですからね。ひっそり生きていかれる。これを若いときに選択した感覚は、正しかったと思いますね」

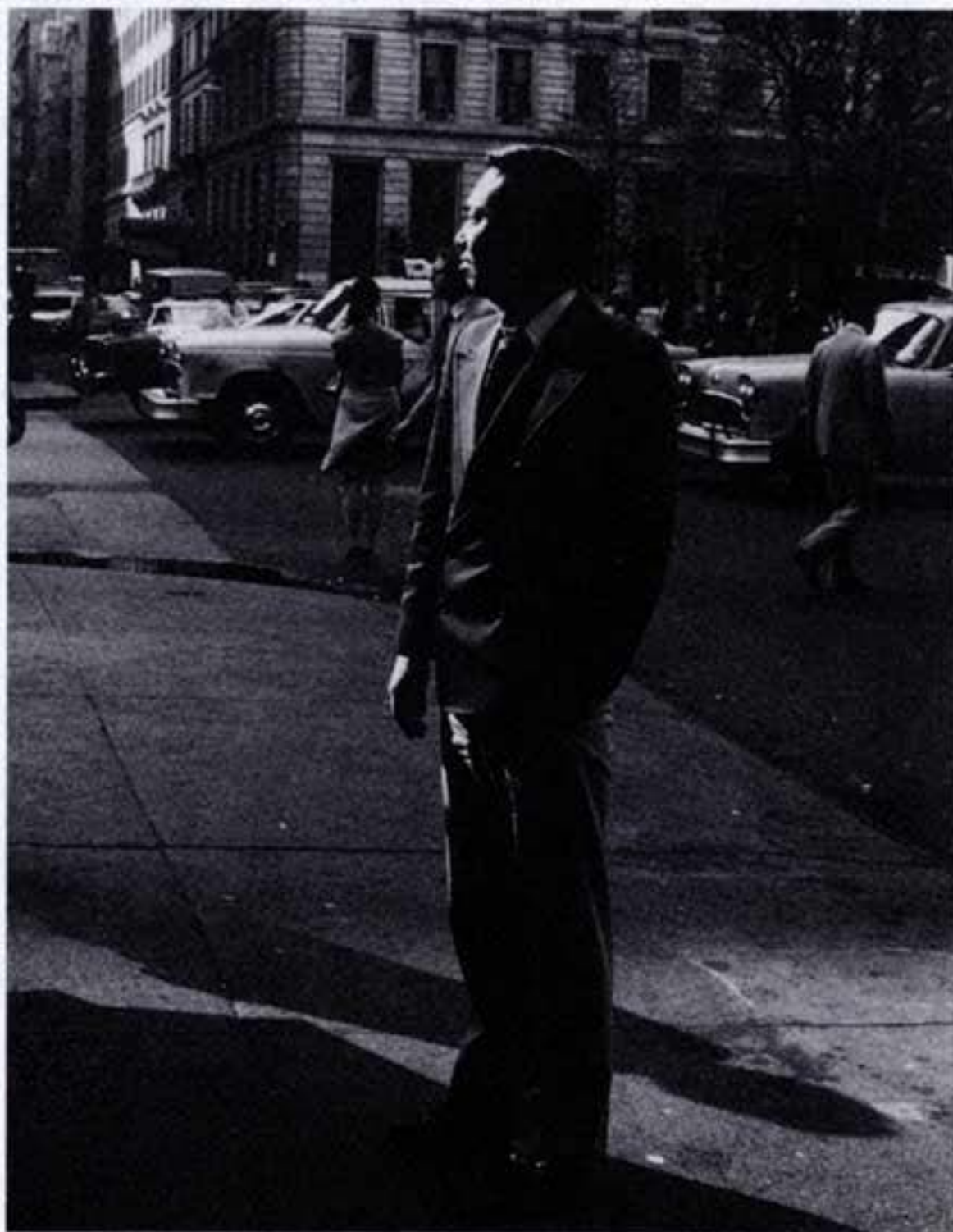
漫画家としてのプロデビューはとても早くて、美大在学中だった。たちまち売れっ子になる。

「デザインもやってましたんで、リサーチする方法がわかってましたからね、まず週刊誌、

月刊誌をたくさん買ってきてテーマを見ていくと、当時なかったのがドロボーものだったんですよ。だから山賊を主人公に決めました。これはアウトローだし、暴力は解放につながりますからね。次に漫画誌を出している出版社の一覧表を作って、売れるような本出しているとすると、そうでもないようなところがあるんですが、そっちへ『山賊の唄』を持ち込んだら作戦成功で一発目から採用。その月から月産百何十ページ描いてましたよ。そのころの超売れっ子と言えは手塚治虫さんで、ときどき間に合わなくなつて長編を落すんです。すると三十ページくらい穴があく。それを代打で一晩で埋めるんです。もう、待ちました！ って感じでやれましたね」

忙しくなつて学校もやめた。もつとも在籍中も学校へはあまり行かなかつたそうだけど。

「ねじれた場所が好きなんです。競馬場、雀荘じゃんそう、芝居小屋。それにゲイバーなんかも、



30歳の頃、ニューヨークにて

わりと早かったですね。そこがぼくの学校だったし、そこで出会った人が先生だった。ぼくがギャンブル場が好きなのは、紳士だろうが犯罪者だろうが平等で、当てるか外れるかしかないことです。そこは非日常の世界だから、普段はいやなやつも優しいし、優しい人間もいやなやつになることがある。賭けるのは金銭じゃなくて、不条理感みたいなものを賭けてるんですね。意味不明ですから、ギャンブルはそこが面白い。だから必勝法なんてあるはずがない。瞬時に確率計算ができて、あとは運氣というか、偶然世界をつかんで行く。それをできない人がギャンブルの世界へくると無惨です。状況をつかんで早く諦めることを知るゲームなんですからね、ギャンブルは」

なんとなく話が哲学的になってくる。

「遊びの要素というのは四つあって、競争とめまいと偶然と摸擬です。価値観は六つあって、権力、経済、社会、理論、宗教、芸術で

すか。この価値観をさっきの四つの遊びで濾過すると、死の恐怖に突き当たる。ぼくの尊敬するギャンブラーは色川武大さんですけど、あの人と話していると最初から最後まで死の話ばかりで、これが楽しいんですね。どうしても轢死^{れきし}っていう字には、ひかれて死ぬというのに楽しいって字が入ってるんだろう、とかね(笑)。とにかく死とダンスするくらい楽しいことはないですね」

本名の色川武大で『百』や『離婚』を書き、阿佐田哲也のペンネームで『麻雀放浪記』などを書いた色川さんの容貌と体軀について、黒鉄さんはこう書き表わしている。

〈長髪のオールバック……はつきりいえば後退しておりましたな、まるでサムライの月代^{さかやき}状態にススキがなびいて、詰まるところ、禿げ上がっておられたワケですワ。造作の各パーツが主役を主張しているほどにご尊顔のそれぞれが立派だから、まさに風貌は落武者の様。体軀のほうは……貫録のある、ええい！

ハラはかなり出とりましたねえ。」（『色いろ花骨牌』^{カルタ}）

そう言えば色川さんが好んで着ていた縞のブレザーからはズボンを吊る太いサスペンダーが見えかくれしていたのを思い出す。

「あの拵えはどう見ても素人には見えませんでしたよね。それで、死後の世界があったら困る、と色川さんが言うんで、どんなふうに困る？ と訊くと、死にたくなるくらい困る、と言うんで、死後の世界で死ぬということはずまり生き返るわけですか、と言ったら非常に困ってましたけどね（笑）」

黒鉄さんの結婚は二十三歳のとき。従妹の紹介によるそうだ。

「この女性と結婚しなかったら、今後こういう女性に会うチャンスはない、と思いましたね。結婚するとき、一般の奥さんがするようなことはまったくなくていいからね、って言いました。だって料理も洗濯も専門家にや

らせたほうがずっとうまいわけだから。それよりよく本を読んで、哲学的な会話のできる伴侶でいてくれるほうが生涯楽しいわけですからね。車の運転は彼女が全部してくれてるんですが、一回死にかけたことがあるんです。いや、ぼくが悪いんですけどね。ずいぶん前の話ですが、あるとき車に乗っていて、前をずーっとダンプが走ってて景色がよくないんで、追い抜いてくれないか、って言ったんです。で、追い抜いたら前がトンネルで車が一台出てきて……あ、死んだ、と思ったんですね。そのときドライバーは普通なら目をつぶるか、ブレーキを踏むでしょう。ところが彼女は目をあけてアクセル踏みこんで、土手へ行ってもう一回ハンドルを切り直したんです。0・0何秒の間に何をすべきか判断して行動に移す、そのドライビングテクニックにはびっくりしました。かみさん褒めるわけじゃないですが、剣の奥義みたいなものですね。あのあと、三、四十分の間ジーツと無言で走り

続けて、なるようになってなるようにしたら二人とも生きてたね、って実感がジワーツとわいてきました」

黒鉄さんが吉行淳之介さんから学んだことの一つに、褒めるのは最良の教育、というのがあったつけ。

「そうです。なんでも褒めちぎらなくちゃいけない。タクシーに乗ってても、あれ、もしかしてF1のドライバーだったの？ とか言ううと、そのようになりますからね(笑)。逆に、君の運転危ないなあ、なんて言うとか余計危なくなるから、その場合は降りたほうがいいんです」

ここでまたどつと吉行さんの話が出た。

「銀座で吉行さんみたいにもてたい、と思つた時期がありましたね。どうしたらもてるかという、優しい、金払いがいい、下品なことと言わない、とかある程度まで紳士であればそこそこもてるけど、それ以上には行かない。

で、吉行さんを観察して真似ることにした。場所はいつも麻雀で集る赤坂の乃なみ。吉行さんのアレルギーは花粉にも反応するんで、おかみが事前に部屋の花を片づけておいたんです。それでも襖をあけるや否やちよつとだけぞつて、あ、この部屋にはさつきまで花があつたろう、って、片手で鼻の先の空気を払いのける。その形のよろしいことね(笑)。これはもてるぞよと思つて、あちこちで真似てみたけど、は？ 元からないですよ、とか、今もそこにありますよ、とかでおしまい。そういう戦略的なのはダメですね」

でも吉行さんを真似たのは、黒鉄さんばかりでもなかったらしい。

「ええ、遠藤周作さん。吉行さんと深川へ行つて……辰巳芸者^{たち}つてのは足袋をはきませんよね。その中の中年増の芸者の足に坐りダコができてるのが見えたんですって。すると吉行さんがサラツとそこを撫でて、君も苦勞したんだなあ、って言ったら、その芸者がグツ

と胸に迫ったらしくて、そのまま泣き崩れた。で、遠藤さんがほかでそれをやったら、ただ単に「なにすんの」ってことになって（笑）。吉行さんのあの顔と様子のよさを持ってない人がやつても所詮は無理。吉行さん一代の芸でしたね」

一九九四年七月、吉行淳之介没。

「訃報を聞かされた瞬間、なぜか在原業平の辞世の歌が浮かんだんです。つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを……。最後の入院が深刻な状況だったので、覚悟はしていたんですが、昨日今日とは思わなかった。しかし吉行さんでさえ死ぬんだと思ったら、死ぬことが怖くなくなりました。乃なみの麻雀仲間が次々に早死にして行つて、園山俊二さんも早かったですね。そのお葬式るとき福地泡介さんに会って、ぼくの車に乗つけたときに見たら、肩にいったいフケが落ちてて、すごいねそのフケは、と言ったら、洗っても洗っても出るんだよ、って言っ

てたけど、翌年亡くなりました。ぼくは数多く人を送ったものですから、久しぶりに会って、指がやたらはれてたりすると、奇妙な気配を感じるんですね。泡介さんのフケのときもそうでした」

黒鉄さんは「見るべきものは見つ」と、『平家物語』の知盛卿のような心境になることがあるという。

「でもね、……とは言うものの、というのがつく。仕事を始めるとまったくそれは自分一人の遊びの世界ですから、誰にも手をつつまれたくない。時間を忘れて没入していて、明け方近くなると目が見えにくくなってきた、自然にストッパーがかかる。そのくり返しの毎日です」（おわり）

2006

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんのぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしたい童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

1970 奈良県生まれ

1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学

1989～入選歴

中日国際ビエンナーレ、京展、関西展

奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展

1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了

1997 滋賀県大津市山中町に独立

<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>

表

紙

の

言

葉

6月号は 雨鳴き

6月は雨と蛙の季節。鳴くのはすべてオス。
オスののどには「鳴囊(めいのう)」という袋
があり、声帯で出した声を鳴囊で共鳴させメ
スへの広告音とする。ゆえに普通の蛙は繁殖
期の夜にしか鳴かないが、ニホンアマガエル
は雨蛙の和名の通り、雨が降りそうになると
昼間でも鳴く。この時の鳴き声は「雨鳴き
(あまなき)」「レイン・コール(Raincall)」な
どとよばれ、繁殖期の広告音と区別される。

第四回

森清鑑

出雲紀行



◆松江城

松江

石見銀山の大田市から再び宍道湖、玉造温泉を経て松江に赴いた。松江は宍道湖東端に位置する城下町である。空から見れば分かりやすいが宍道湖に注ぐ川筋がぐるりと外堀を形成し、内堀は松江城を囲む。松江城は平野に造られた城塞である。湖に面したところが城下町で、堀に沿って輪を描くように山の手、武家屋敷がある。城の北側、外堀の北田川沿いに残っている武家屋敷をまず覗いた。この辺りは塩見縄手なわてと云い（中老、塩見家の屋敷に代表される）、江戸時代には武家屋敷が並んでいたところだ。堀と面しているので地形は分かりやすい。長い堀が続いている。武家屋敷がこれだけ分かりやすく残っているところもまた珍しい。門の中を覗くと砂地の広場の先に肅然とした佇まいがあった。この屋敷に連なる堀が現知事の公邸でこれも元は武家屋敷であったのだろう。江戸時代には、堀を囲むように武家屋敷が存在していたに相違ない。武家屋敷の一角に小泉八雲の旧宅があった。八雲が節と国際結婚して半年間新婚生活

を送った家がそっくり残されている。門をくぐると広い敷石の庭がある。夕刻の陽の陰りが漂い、八雲のことが駆け巡った。住まいの左隣に八雲記念館がある。これも旧家の面影を残すもので彼の書簡や、旅行鞆などの所持

品が展示されている。松江市民の八雲に対する思いには熱いものがある。この辺り一帯は全体的に昔の武家屋敷の印象を色濃く残している。

松江では全国でも珍しい「堀川めぐり」を味わうことができる。松江城を囲む内堀と外堀を船頭さんの案内でゆったりと鑑賞する。十名程度の小船には折りたたみ式の天蓋屋根が取り付けられている。橋を潜る際には天蓋を低くする。橋桁にぶつからないためだ。船頭さんの声と同時に、客は身をこごめる。中には腹ばいになる人もいる。堀



◆橋をくぐる時船の天蓋をたたむ

には、嘗て武士が行き来したであろう橋がいくつも架けられている。発着場から新橋、稻荷橋、亀田橋を潜ると、原生林が鬱蒼と茂っている。生い茂る枝が水面にかぶさっている情景も随所に見られる。木々を縫うように小船は滑っていく。橋はそれぞれ形状が異なり、極めて個性的な造りである。緑樹橋を右折し外堀に向かうと左手に県庁が見える。花園橋、うべや橋を抜けると外堀に出る。ここで船は大きく左に曲がる。大きな京橋を過ぎると左手に「なんじゃもんじゃ」の大木が現れる。船はさらに進み、甲部橋を左折、米子橋に出る。この橋は一風変わった造りで、いわゆる番屋風になっている。昔は番所も兼ねていたのかも知れない。瀬田橋を再びぐりと左に曲がり、内堀との合流点に架かる宇賀橋を潜って間もなく松江城が姿を現す。千鳥城である。城を囲む原生林を堀から眺めるのも一興である。ここから堀沿いにある塩見縄手の松並木と武家屋敷の姿が展開する。樹齢四百年の黒松は堀から見るとまた異なる興味がある。かくのごとく城堀の古景を満喫することが

できる。このような「堀川めぐり」は全国でも数少ないのではないだろうか。



◆宇賀橋



◆堀から見た武家屋敷・樹齢四百年の黒松

松平治郷

松江の殿様で今もって知名度の高いお人が松平家七代目の藩主、松平治郷^{はるさと}、晩年の号、不昧公^{ふまい}である。十七歳で藩主になったとき松江藩の財政は破滅状態にあった。

松平治郷は宝暦元年（一七五一年）、江戸は赤坂溜池に隣接する松平出羽守の屋敷で生まれた。格式は高いが、屋敷の規模は、江戸古地図で見ても尾張家などと比べてそう大きくはなく、際だつて目立つ存在ではない。松江松平家は代々出羽守を名乗っていた関係で、江戸の民衆は、この屋敷を「出羽様の屋敷」と呼んでいた。この時、当主は松平家六代目の宗衍^{むねのぶ}。

治郷が七代目を継いだとき、「出羽様滅亡」という噂が庶民の間に流れた。雨漏りのひどい屋敷には時とすればほんの数両の金に窮したといわれる。豪商は出羽様に金を貸すこと厳禁と裏で公然と囁くほどであった。「出羽様」と言う言葉は、貧乏大名の代名詞にすらなった。しかし、治郷の約四十年の治世の間に、松江藩は日本有数の富裕藩に変

貌したのである。

治郷の父、六代目宗衍は、先代の死去により三歳にして当主となる。長じて彼は、相次ぐ飢饉・天災による、負の財政を改善すべく、積極的な藩政改革に着手する。財の創出に長けた人材を登用し、商業資本の導入を図り、次々と新事業に着手する。宗衍は、有能な当主であった。しかし、結果的には、藩の財政は、先代を上回る惨憺たる状況に陥った。格式の高い家系とは云え、お取り潰しの危機を察知した彼は三十代にして隠居し、息子治郷に当主の座を譲ったのである。

藩主の懸命な努力にもかかわらず、改革は失敗した。この改革は、小田切尚足^{ひさたり}という才覚ある、人材を抜擢し、彼に責任と権限を与え、いわば下意上達ともいうべき目論見の元、これまでの農業中心政策から商業資本導入による米作以外の殖産を手掛けるというものであった。こうしたことは、当時江戸幕府も行っている政策である。改革の中心は「趣向方^{しゅこうかた}」と呼ばれる新組織で、直接利益を生み出す商業重視の政策に取り組んだ。稲作によ

る石高増加改善には目をつぶり、手っ取り早く金になる商業事業の推進が眼目となった。もの作りとしては、米作より換金作物の奨励を、そして、金になる藩の専売品目の醸成を主眼とした。基本的には商業・金融主義で莫大な藩の借財を早期に解決しようとするものである。しかし、足が地に着いていないこの改革は藩財政のひずみを生む。金融資本の横行、暴利をむさぼる豪農・豪商、税を取り立てることしか能のない役人の横行、事なかれ主義の幹部等々である。藩民の志気も低下。結果的には、地道なものづくりよりも金が優先される社会。農民は借金にあえぐ。新産業は失敗するか、または全く成果が上がらず、いたずらに投資費用の増大を招く。江戸・大阪の金融業者、豪商・豪農からの資金調達により、さらなる負債利子がつまれる。庶民への増税、藩士禄高の削減も利子の支払いに消える。いわゆる悪循環である。待っていたのは、換金作物の栽培奨励策による稲作地の荒廃であった。長年の不作と重い年貢にあえぐ農民一揆などの不安材料が続出する。

また、悪いことに宗衍の時代には、凶作に加えて、斐伊川の氾濫が度々起こった。斐伊川は多くの支流を集めた、出雲の母なる川であり、肥沃な大地を生む。しかし、その一方でスサノウノミコトのヤマタノオロチ伝説が物語るように一度氾濫すれば、恐ろしい災害となる。順調なら石高二十五万石といわれる豊饒な収穫も一度、洪水に見舞われれば、半分に減少してしまう。かくて米倉は空の状態。改革の結果、皮肉なことに藩の借金は嘗てないほどに増大し、幕府からの借財だけでも五十万両に達した。改革の中心人物、小田切尚足は辞任する。このような藩財政壊滅状態の時に、さらに追い打ちをかけるように、数万両を要する比叡山山門の修復工事を幕府から命じられた。この時、命がけでこの難問題を成し遂げた人物が家老の朝日丹波である。

朝日丹波は、切れ味鋭い、頑固一徹の真摯な人物で、治郷の幼少時の教育係をやった。治郷が間違った行動を示すと鬼の形相で謝るまで容赦しなかったという人物である。父、宗衍に対しても容

赦なく、直言をする。しかし、治郷はこのような人物が大好きで一番の信頼を持つ。文武両道、幼少時から並はずれた才覚を発揮する治郷は、剣術の稽古においても手加減してくる師範を嫌った。それはとても大名の武術の嗜みなどと呼べるものではなく、彼の腕前は、正真正銘の師範代の域に達している。馬術、槍術しかり。こうした物事に對し、真摯に徹底する激しい性格は、何をやるにしてもその後の彼の人生を形作っていく。

治郷は、父宗衍の改革期には蚊帳の外にあった朝日丹波を藩財政建て直しの中心人物に添える。齡六十を超えた老丹波は固辞するが、治郷は頑として説得する。比叡山修復時に見せた丹波の力量、幼少時から自分を鍛え上げてくれた人物への信頼。丹波の意図するようにやって欲しい、何があっても下手な口出しや介入は一切しない。結果責任は自分が取る。君臣一体、一蓮托生の心構えである。老丹波はついにこの説得に折れ、命がけの再改革に乗り出す。

朝日丹波は一年間何もせずに藩の現状をつぶさ

に見る。行政組織はバラバラ、矛盾だらけ、機能していない。方向性がない。資金の流れはいわば中間搾取の状態で藩の健全財政に直結していない。無駄だらけ、コントロール機能を失っている。事なかれ主義の藩の中枢の者、豪農・豪商、商業主義のもと甘い汁を吸ってきた者は、好々爺然とした丹波を甘く見るが、改革が始まると驚愕する。それは予想もしなかったほどに厳しい、農業立国を目指し、無駄をそぎ落とす、二十数項目に及ぶ、徹底的な財・行政改革であった。まずは、江戸屋敷経費の過酷なまでの削減。領民に非常な負担をかける以上、まず上からの儉約である。失敗した前改革の中心組織「趣行方」の廃止。無駄な人脈、藩士を含め約一千名のリストラ。一人二役兼務。そして、かねてから考えていた、斐伊川の大改修工事に着手する。安定した、肥沃な農地を取り戻すには、治水事業からという発想である。氾濫防御策として、「川浚え」と呼ばれる川底を深く、掘る作業。高く、堅固な堤防構築。水流を妨げる島状土砂堆積物の除去。斐伊川を軸に新たに多くの

川筋を作り、耕地面積を増やす「川^{かわ}違え」工事。のべ数百万人を動員することになる、この大工事の結果、以後氾濫の不安は消滅。田畑は急速に増えた。彼は、リストラされた者、田畑を失った農民などをこの工事に従事させ、日当を支払う。次いで行政組織の全面的に改変、甘い汁を吸うばかりの人事の刷新。庄屋も全員交代。領内の債権者に対しては借金の放棄を強要し、藩と豪農・豪商間の借金は破棄。合法的に高利をむさぼれる温床になっていた、藩の銀札を廃止。これにより借金にあえいでいた農民は救済された。既得債権者の非難ごうごうの中で、朝日丹波はこれらを実行に移す。また、多額の借金がある大阪の金融業者に対しては返済計画を明確に示し、さらなる協力を依頼した。生産物の利益が豪農・豪商その他に分散し、失われていた主権を藩に取り戻し、生産物の七割近くが藩に献納される組織とした。その上、さらに年貢比率を大幅に引き上げる。農民にとっては大変な増税である。しかし、農民は齒を食いしばって耐える。朝日丹波の実施策が機能し始め

ると信頼することができたからである。そして約束事はきっちり守られていく。例えば、三年で農民への年貢比率は改正され元に戻されている。江戸大阪の蔵前商人を説得し、米の価格操作を止めさせ、穀物価格の極端な上下動を阻止するため、藩に常平倉を設置する。また、穀物運搬の専用船を設置し、流通の合理化を図る。さらに凶作に備え、豪農・豪商に特別課税を課している。

治郷は江戸にあつてつぶさに状況を把握している。江戸藩邸の厳しい、質素な生活ももろともせず。荒療治とも思える朝日丹波の改革に対する風当たりは強い。治郷の丹波への信頼と支持は微動もない。幕府との対応を含めた問題があると丹波から治郷にすぐ連絡が来る。行政体制を一新し、商業資本にかき回された、うみを出し切り、基幹の新農業体制ができあがると藩財政は急速に回復してきた。治郷になってから不思議と天候にも恵まれ、凶作がなく豊作が続いたことも幸いした。空の藩庫には備蓄米が貯まり始め、金蔵が少しずつ豊かになっていく。それにつれ江戸屋敷への送金、

五十万両という莫大な幕府負債の長期返済が軌道に乗り始める。七十歳の丹波は辞職を申し出たが、治郷は許さない。松江に帰った治郷は、朝日丹波に郷の一字を与え、朝日丹波郷安とし、加増する。

農業運営と穀物流通が軌道に乗ると、特産品産業の市場開拓が始まる。当初から治郷は、藩の将来は、新たな殖産産業の醸成と健全な商業運営に懸かっていると予見している。しかし、丹波が命がけの農業改革に取り組んでいたとき、そうした考えを丹波に露ほども見せていない。そして今や、地場産業興隆の時。やる気のある若い人材の出番である。江戸には丹波の息子、朝日千助がいる。治郷の元にあつて非常に優秀な人材で、この人の元に若い人材が活躍を始める。近藤庄蔵、荒木田円左右衛門などである。近藤は、朝日丹波の密使として治郷に会っている。丹波の苦勞を江戸の若殿は分かっているのかと命がけの諫言を目論む。しかし、会ってみると治郷の発言と態度に電撃的なショックを受ける。「爺の改革の難儀、苦勞には感謝している。幕府に対して爺の方針通り対処す

る。頑固者の爺とて若い者の突き上げもあるうが、一致協力して欲しい」。別れ際、近藤の肩をぽんと叩く。その無駄のない、切れ味の言葉、態度、見識。そして何とも云えぬ暖かみ。また、質素な生活に驚く。(つづく)

参考文献「真説 松平不昧」長尾遼 原書房



ただこの世、のちの世のために仏につかえんには、心をいたし、
ま事をはげむ事、この世もおもう事かない、のちの世も浄土にう
まるる事にて候なり。

【法然上人『百四十五箇條問答』】

ただこの現世をよりよく過ごせるようにと、

あるいはよりよい後生を願って仏さまにおつかえするなら、

心の底から誠の思いで励んでこそ、

現世での願いもかない、

また、後世には浄土に往生することもできるのです。

みんな、掌を合わせて祈ろうよ

うれしい番組が復活していた。筆者が小学生の頃（たしか毎週土曜日だったと記憶しているが……）に放映されていた「まんが日本昔ばなし」だ。調べてみたら、昭和五十年一月から平成六年九月まで実に二十年、九五二回にわたる長寿番組だったという。

♪坊や、よい子だ 寝んねしな 今も昔もかわりなく

この主題歌に聞き覚えのある方は少なくないに違いない。クネっとしたメロディ、市原悦子さんと常田富士男さんの絶妙な語り、絵の可愛らしさ。どれも十分に子どもの感性に訴えるだけのものだった。もちろんそれは、おとなにとっても同様ではなかっただろうか。

放映にピリオドが打たれて以降、「復活を」「再放送を」の声は途切れることなく放送局に寄せられていたという。その理由の大半が「自分の子どもにもぜひ見せたい」というものだったらしい。昨今の、子どもたちの関係する事件（おとなに起因するものも、子どもに起因するものも）が増加している寒々しい世相と、そうしたオーダーの声の数、強度が比例していたであろうことは容易に想像がつく。最終回から十一年、そんな要望に応え、昨秋、満を持して再放送がスタート。個人的にも、二人の小学生の父親としても喜ばしい限りだ。放送局に感謝したい。

昔話、おとぎ話は、体も心も成長期にある幼児・児童に大きな影響を与える。中には残酷と思わせるものもなくはないが、概して事の善悪、人や他の生き物に対する思いやりや慈しみ、道德、倫理といったものを示唆してくれる格好の教材と評することは、間違っではないだろう。

どの話が、いつごろ、どのような経緯を経て編み出されたのかまでは筆者は調べたことはない。しかし、そんな学術的なことはこの際どうでもよい（少なくとも筆者にとって）。ただ、そうした示唆に富んだ話が数多く生まれたという事実を見れば、人にとって大切なことを語り継いでいかななくてはならないという意気が、日本全国津々浦々にあったことだけはわかる。それで十分だ。

子どもたちに伝えるべきこと——。その一つが、神仏に対する敬いの心であると、筆者は勝手に確信している。

たとえば「笠地蔵」。日本の昔話の代表選手と言っているだろう。ひもじさに耐え、慎ましやかに暮らす老夫婦。町へ笠を売りに行った帰り道、雪にうずもれそうな六地蔵に、売れ残った笠のみならず自分がつけていた笠までもそのおつむにかぶせてあげたお爺さん。そのやさしさに報いようと、荷車いっぱいのおつむを届けてくれたお地蔵さん。「現世利益を後押しする内容だ」などという声には耳を貸さなくていい。謙虚さと思ひやりは神仏も称賛してくれる。

子どもにこれが伝わればいいのである。

たとえば「養老の滝」。病気で伏している父親のために山坂を越えて薬を探しに行く息子。山奥で見つけた滝の水を飲んでみると、これがお酒。持ち帰って酒好きの父親に飲ませると……。あら不思議、病気は快癒。「吞兵衛のオヤジを肯定してどうする」などという声は笑ってやり過ぎせばいい。孝行の大切さが伝わればいいのである。

一昨年の秋とこの四月、お話、おそうじ、写仏、レクリエーションといったプログラムで、子ども修養会を開いた。いずれも小学一年から六年生まで二十人ほどが集まってくれたが、皆、筆者のつたない話でも、真剣に聞いてくれた。特に地獄の話には目を輝かせていた。約一時間の写仏では、話し声は皆無に等しかった。子どもは子どもなりに、こうしたことに惹かれるもののようなのだ。こちらが大変な勉強をさせていたのだ。

参加者のうち、家に仏壇や神棚があると答えたのはほんの数名。神仏が家庭という現場から遠くなりつつある現代、テレビまんがの昔話をきっかけに、まずはそうした「大切なこと」を話題にするのも、今どきの教育・教化と、法然上人なら見てはくれまいか。

(小村 正孝)

恋は足手 まとい

監督

ミシェル・ドヴィル

身の不遇を託つ、杜甫晩年の五言律詩『岳陽楼に登る』は「涕泗流」る、と結ばれる。涕は涙であり泗は洩、つまり鼻汁である。号泣が涕ばかりでなく泗を伴うものであることを思い出させてくれたのは『単騎、千里を走る』における「李加民」役の力演だったが、



6月24日(土)よりシアターN渋谷にてロードショー以降順次公開

あれほど盛大(?)でなくとも「すすり泣き」という言葉も「泗」の存在を前提としている。そして十九世紀末の喜劇作家ジョルジュ・フエドールの原作に基き今年七十五歳になるミシエル・ドヴィル監督が、肌目こまかい入念な演出を愉しむ『恋は足手まとい』のタイトル・バックに映し出される、アールヌボー調の花と蔓とが優雅に縫い込まれたカーテンを通して、漏れ聞こえて来るのが悩ましい「すすり泣き」の音なのだ。

トレイにキッチンと重ねられた、いかにも肌ざわりの良さそうな亜麻布のハンカチが、次から次へと摘みあげられる瞬間、クロース・アップされる縁の部分の、手の込んだ縫取りからも、絶えず「泗」を処理し続ける女性の趣味及び生活の水準が想定され、さらに「すすり泣き」の原因も「待ち人來らず」であったことが、「待ち人到来」の報によって立証されるに及んで、色男エドワード・ボワダンギアン(シャルル・ベルリング)の男冥利に

羨望を禁じ得ないのだが、彼の為に仕立てられたとおぼしいキモノガウンにも寛ぎきれないぎこちなさに、観客が不審を抱き始める頃までには「彼女」こそ当世に時めく歌姫リュセット・ゴーチエ(エマニユエル・ベアール)であることが報らされ、お互いを「ドウドウ」「リュリュ」と呼び合う仲であるにもかかわらず、不屈きなことに男は女を「手足にからまる糸」(原題の直訳)視しているらしいことが匂ってくる。

「色男、金と力は無かりけり」の筈だが、この罰当りな男のばあい体力はむしろ拔群であり「性力」に致ってはゴチック体で大書すべき「絶倫」ぶりを発揮するのだが、金のほうは「無かりけり」でアパルトマンの水道さえ止められてしまう結末。髪結いの亭主ならぬ歌姫のヒモに納まっていれば良さそうなものを、貴族の小娘ヴィヴィアンヌ(サラ・フォレスティエ)との「婚約式」目前まで、秘かに漕ぎつけていたのは「上昇志向」のなせる

わざであるうか？

『仏和大辞典』によれば「手足にからまる糸」とは「昔の女のために動きがとれない」状態とあるが、リュリュ自身はもとより、登場人物の殆んど全員（ドウドウを除く）が、リュリュが彼の「昔の」女であるとの認識を全く欠いている状況のまま、無事「婚約式」を成就させようと暴走する彼の手足に次々と「糸」がからむのは、むしろ当然で、口八丁手八丁に全身十丁ぐらいまでを駆使しつつ、その都度「糸」を外そうとする彼の奮励努力によって、喜劇のプロットが快調に展開するのは、俳優シャルル・ベルリング、および彼の道連れにされる俳優たちの、体力・運動神経に負うところ、すこぶる大なるものがあり、ドタバタと誤って貶称される、コメディの醍醐味が満喫できるシーンが「目白押し」になる。

たとえば「上昇志向」のかれは、しばしば階段を駆け登るのだが、貴族の館に突然姿を現したリュリュの目を晦ますために、なんと

屋根裏部屋まで駆け登り、その理由を「避雷針の状態を確かめる為」だと熱弁を揮うのだが、エッフェル塔建設の興奮さめやらぬ時代背景を思うと、息を弾ませながら傾聴させられる面々への説得力の程も推定できるわけで、あとは「見てのお楽しみ」といいつつも、「芸は身を助く」の原理により、彼の「上昇志向」が思いもよらなかった形で、成就されることだけは明記しておかねばなるまい。
アレクサマタガ「色道」も「芸」アルスの一つである。

例によって蛇足……フェドールの芝居を『クルヴェット天から舞いおりる』（原題『マキシムから来た女』）をテレビ中継で見たことがある。市原悦子さんがバレリーナーのように両手を腰に当てて片脚を高く掲げつつ、確か「トットット、オトツツァンには内緒だよ」と珍妙な台詞を唱えながら、舞台せましと駆け巡っておられた記憶がある。孫娘にインターネットで調べてもらったら昭和四十二年九

月、市原さんは三十一歳だった。とはいえ、役者さんたちの運動神経や体の柔軟性は想像以上のもので、たとえば伝説的名優「六代目」さんが亡くなる前の年に「ブーンと空気が唸るような」トンボを切って見せたとの、愛弟子の証言が関容子さんによって記録されているし、早い話、話題のイナバウアーにしても「道成寺」の魁春さん「鷺娘」の玉三郎さんたちの技は、荒川静香さんに優るとも劣らないものだと思う……少なくとも脚をあんなに開かずにやってのける点においては。

蛇足その二。前記「避雷針」の場で「オラージ、デゼスポワール」というフランス語が懐かしく耳に飛び込んで来た。オラージは「雷」デゼスポワールは「絶望」だから、「雷が落ちたら万事休すです」とまくし立てるのだが、オラージを二つに分けて「オ・ラージ」とすると「ラージ」は「怒り」だから「絶望」とつなぐと「ええ腹が立つ！ 情けない！」という意味になる。

畏友、大久保直幹東洋大学名誉教授にご託宣を仰いだところ、「オ・ラージ・デゼスポワール」はフランス古典劇、名作中の名作、コルネイユ「ル・シッド」第一幕、第四場の台詞とルーツが明かされた。「雷が落ちたら万事休すです」が「ええ腹が立つ！ 情けない！」のパロディであることに気がつくならば、腹を抱えて爆笑せざるを得ない、ということに気がつき、更に「雷」は「氷山の一角」に過ぎず、同じ趣向が『恋は足手まとい』の随所に仕掛けられている可能性にも気がつく。

ところで、これらの仕掛けは原作者フェドーの「直説」によるのか、ドヴィル監督と奥さま（脚本・製作ロザリンド・ドヴィル）の「加上」によるものか？ 案外、後者が多いのではないかと思う。登場人物の一人にケータイを持たせて「古道具屋で見つけた」と、うそぶかせる御仁なのだから。（長野・十念寺住職）

般若心経（心経）ほど多くの人々に親しまれているお経はない。湯飲みや手ぬぐい、扇子などにも書かれていて、人々はお守りのように愛用している。

短いお経にも拘らず、仏教の「空」の教えが凝縮されている。書店には常に五・六冊以上の解説書が並んでいることから、心経に対する人々の関心の高さを知ることができる。我が本棚にも七冊ある。

その心経をサンスクリットから漢語に訳したのは、玄奘三蔵といずれの解説書にも記されている。私も今まで心経は玄奘、阿弥陀経は羅什と思い込んでいた。

そして経文の「色即是空 空即是色」の文にふれる度に、見事な訳文だと常に感心し玄奘三蔵を崇める心を深めていた。

ところが、ある論文（後述）を開いて

驚くと同時にわが不勉強を恥じた。

その論文によると、羅什が訳した大品般若経（二万五千般若波羅蜜経）の中に次のような文があると述べられている。

色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減 是故空中 無色無受想行識 無苦集滅道 （以下略）

これらは心経を構成する大切な要文でありこれなくしては心経は成り立たない。その要文は羅什の訳出したものである。心経は羅什訳の多くの文を模してできたものである。従って心経全部の訳者は玄奘ではなかった。玄奘は羅什より数百年以上も後の人だ。

○論文著者 ジャン・ナティエ氏

（三康文化研究所年報第三十七号所載）

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●水

〔特選〕満潮の水汲み替うる浅蜷桶

井村 善也

浅蜷を掘ってくると潮を汲んできて生かす。同時に砂を吐かすのである。こうしておいて必要なだけ使ってゆくのだが、残った分は水を替えねばならぬ。満潮時の新しい水を汲むのは、浅蜷がなくなるまで続く。

〔佳作〕雪解水茂吉の墓のすぐ其処に

佐藤 雅子

戒名に水子とありて躑躅咲く

有田 嘉久

水平とならぬシーソー花筵

奥村 嘉久

●誤

〔特選〕誤字ひとつある花守の注意書き

長谷川達人

この頃公衆道徳も守れない人間が多いから、桜守も大変だそう。ごみは捨て放題、散らかし放題。放題のつかないものはなからう。

それだけに注意書きは増える。誤字を見つけ
たのがこの句の手柄になった。

〔佳作〕 誤字多き母の頼りや花の雨

河合富美枝

正誤表付きの俳誌や花の昼

奥村 嘉久

春愁や誤診と知らず過ぎいたる

石原 新

●自由題

〔特選〕 旅立ちの夫見送りて田水見に

奥村 清子

旅に立つ夫を見送れば、家でのんびりとい
う気楽な生活ではない。ついでに田を一回り
してくるのである。あるいはむしろ見送りが
ついでかも知れない。水の見回りはこれから
の稲の生育に欠かせないのである。

〔佳作〕 歩行ままならぬ夫あり春立てり

中島富士子

散る花の三つ四つ墓の背中かな

長谷川達人

城壁の名残りの土手に草青む

一丁田美恵



参加作品.....編集部選

誤

春愁や気付いて欲しき誤りを

金谷友江

春なれば時の誤報も許されし

佐藤雅子

木菟鳴くや人は誤り日々ただす

中島富士子

道路標の向きの誤り東風が指す

片桐てい女

村が町に町が市になる祭鮎

山本美代子

良夜かな村に増えたる猫の数

佐藤雅子

水

水琴の音しのばせて苔の花

河合富美枝

いさかいを水に流して梅雨はるる

金谷友江

鵜飼果て幻と消ゆ水の綺麗

片桐てい女

今昔の玉川上水太宰の忌

中島富士子

清め水落花を避けて掬いけり

石原 新

清明や水の流れの軽ろき音

浜口佳春

自由題

梅雨寒や逝きにし夫のこと浮かぶ

金谷友江

カーテンに風拗ねてゐる目借時

片桐てい女

身籠りし面輪至福に青き踏む

佐藤雅子

黄泉に咲くみすずの詩や聖五月

河合富美枝

新任地靴を光らせ島小春

増田信子

悠然と八十路を生きて蓬餅

谷しげ子

一坪の花壇おこして土匂う

中村真一

春場所や土俵の決戦異国人

東 保

浄土誌上句会のお知らせ

題

⑤季語ではありません

雨 絵

自由題

締切・二〇〇六年六月二十日

発表・『浄土』二〇〇六年八月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

31

かい目

かまち♡ふしろう



法然上人鑽仰会

公開講演会の
お知らせ

日時 平成18年6月22日(木曜日)
午後3時より4時半まで
場所 大本山増上寺慈雲閣
東京都港区芝公園4-7-4
地下鉄都営三田線「御成門駅」徒歩5分
地下鉄都営浅草線・大江戸線「大門駅」徒歩7分
JR線「浜松駅」徒歩10分
会費 会員 無料
一般 千円
申し込み 会員、一般ともに不要(先着150名)
主催 法然上人鑽仰会
後援 浄土宗総合研究所

日本仏教の再生は可能か

講師

上田紀行

法然上人の再来を求めて

うえだ のりゆき

1958年東京生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。愛媛大学助教授を経て、96年4月より東京工業大学社会理工学研究科価値システム専攻へ。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、著書において「癒し」の観点を最も早くから提示した。現代社会の諸問題にも、新聞・テレビ等のマスコミにおいて積極的に発言し、日本社会の変革への提言を続けている。また学内においても、講義にディスカッションやワークショップ形式を取り入れるなどの試みを行っており、学生による授業評価が学内トップとなり、「東工大教育賞・最優秀賞」(ベスト・ティーチャー・アワード)を学長より授与された。著書に「がんばれ仏教」「生きる意味」他。

問い合わせ先
法然上人鑽仰会

105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

電話：03-3578-6947 ファクス：03-3578-7036

『浄土』通巻800号記念式典 協賛記念品のお知らせ

本年一月三十一日に行いました『浄土』通巻800号記念式典にて、多くの方から協賛金をお寄せいただきましたこと、深く御礼申し上げます。

その折、協賛金をお寄せいただいた皆様への記念品として、狛下、三台下による寄せ書きの色紙をお送りさせていただきましたが、協賛金をご協力いただきました方の方の数に合わせて製作したものです。ですので、恐縮ですが、今後協賛金をお寄せいただきましても記念品をお送りさせていただくことができませんので、ご了承下さいますようお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会事務局

編集後記

万緑の中に埋もれし我ひとり

岱潤

何年前からか、ペットを亡くしたひとり住まいの方などが、ペットの遺骨と向き合って暮らしていると、うつ病の様な状態になってしまふ、いわゆるペットロス症候群と呼ばれている症状の方が増えているようだ。

ところが先日、知り合いの娘さんの離婚相談で、友人の弁護士と話しをしていたとき、弁護士が「そのご両親はペットロス症候群ですね」と言い、「ムムツ」と唸ってしまった。

その娘さん結婚して一年半だが、両親と同居した家には、三年前に自死をしたその娘さんと同名の娘さんが分骨として

仏壇に祀られていて、両親は毎日三度の食事を死んだ娘にも同じように作り、死んだ娘さんの部屋はそのままの状態だったという。家族には自然のその状態は、嫁いだ彼女にはとても辛い雰囲気、とうとう一年前から精神科に通うようになってしまったそう。

いわゆるペットロス症候群は供養されないという不安感がもたらすものと思っていたが、人であり葬送の儀や法事はされていても、供養されたという実感がないときは同じなのだと理解した。

法要儀礼に我々は形ばかりでなく、もつと責任を持ち、意味づけをしなければならぬと深く感じた。

(長)

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 江口定信(浦安・大蓮寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 大田秀三(大本山・清浄華院)
 北山大超(焼津・光心寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 袖山榮真(長野・十念寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村眞道(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 樋口隆信(石巻・西光寺)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓爾(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(芝・天光院)
 脳博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山・光明寺)
 宮林雄彦(横浜・大光院)
 山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十八年 五月二十日

発行

平成十八年 六月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3月合併号で通巻800号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は1700名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800冊以上、総35000ページあまりの貴重な財産をPDF化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在360冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊「浄土」検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果かから読みたい浄土を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすればPDFファイルが表示されます。お読みいただくにはPDFビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『差出人は法然さん』
600円

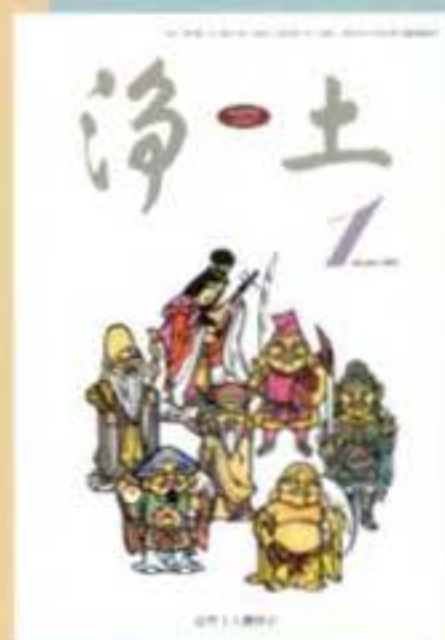
選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



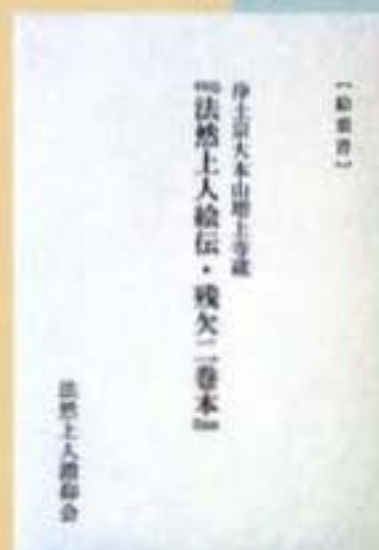
『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036